発問例

・「導入の問い」のねらい

小さな生き物の姿や動きを、意識して観察してみたことがありますか。

（ねらい）かわいい生き物なら、ふれあいに感情が高まったり、嫌悪感のあるものなら目を背けたりする体験は多いだろう。本作品は、目に見えるものをじっと観察し、そこから生じる自らの気分や考えのうつろいも克明に書き記そうとする。それはありふれたようでも、特別な行為であることを、作品を通じて感じたい。

●一九六ページ

問 **小説の前提となる時・場所・主人公の状況についてまとめてみよう。**

答 時＝稲の穫り入れの始まる頃（秋）。
場所＝城崎温泉。散歩するのにいい場所がある。
状況＝けがの後養生のために城崎に来た。
一人である。
頭がはっきりしない。
物忘れが激しくなった。

問 **主人公の日常はどのようであったか。**

答 話し相手がいない。
読むか書くか。
ぼんやりと風景を見ている。
散歩をする。

●一九七ページ

問 **「やはり」（5行目）は、どのようなことを受けているか。**

答 「冷え冷えとした夕方、寂しい秋の山峡」という周囲の風景が持つ寂しい雰囲気。

問 **「寂しい考え」（5行目）とは、どのような考えか。**

答 一つ間違えば、祖父や母の死骸が脇にある墓の中で、青い冷たい顔をして寝ていただろう、という考え。

問 **「しかしそれには静かないい気持ちがある」（6行目）の「しかし」は、どのような働きをしているか、「寂しさ」（寂しい考え）と「静かさ」とを対比して説明しなさい。**

答 「しかし」は「寂しさ」と「静かさ」を対比させる接続詞で、「寂しさ」には親しみ（「いい気持ち」）を感じないが、「静かさ」には親しみを感じていることがわかる。

問 **◎「それは寂しいが、それほどに自分を恐怖させない考えだった」（15行目）のは、なぜか。**

答 身近な人からの想像でもあり、死は誰にでも到来する静かな境地であり、騒ぎたてるようなことではなかったから。

●一九八ページ

問 **「いつかはそうなる。」（1行目）とはどういうことか。**

答 死んで、墓の下で祖父や母の死骸を脇にしながらお互い何の交渉もなく横たわること。

問 **「いつか知れない」（2行目）とあるが、この「いつか」は「それがいつか？」（1行目）の「いつか」とどう違うか、説明しなさい。**

答 2行目の「いつか」は極めて切実で切迫感が強いのに対し、1行目の「いつか」は遠い漠然とした時期を指し、切実さ、切迫感に欠けている。

問 **「そういうふうに」（5行目）とは、どのようなことを指しているか。**

答 本当は死ぬはずだったが、自分にはしなければならぬ仕事があるから、何かが自分を殺さなかった、ということ。

補 「クライブのように」ということだが、主人公の立場に置きかえて考えてみると、電車の事故で重傷を負って死んでしまったかもしれないのに、自分は辛くも死を逃れて生きている。生きているということに何がしかの意味があるのだということになる。「（クライブが）激励される」（5行目）ように自分も、助かっ

た命に意味を感じたいということになる。

問 **◉「感じたかった」（6行目）と過去形で表現されているところに、どのような思いが表れているか。**

答 生き残ったことに自分だけの人生の意義があると考えたが、一方で、そこから微妙に離れている思い。

●一九九ページ

問 **「いかにも静かな感じを与えた。寂しかった。」（6行目）に述べられている「静かさ」と「寂しさ」が指す内容上の相違点を説明しなさい。**

答 「静かさ」は死そのもののイメージ、「寂しさ」は【死骸】を【生きているもの】と比較したときに抱いた感情を指す。

補 「静かさ」は死そのものがもつ普遍的、絶対的な永遠性を想起したときに生じる穏やかな心情を指す。それに対して「寂しさ」は【死骸】と【生きているもの】の物質的な対比から感じる生から死への変遷、ひいては自己消失に対する落ち着かない心情を指す。

この問より先に、一九九ページ12行目での「死んだ蜂」の捉え方についての発問を考えると、この問もわかりやすくなる。

問 **「そこ」（10行目）とは、どこを指しているか。本文中から抜き出しなさい。**

答 玄関の屋根

問 **「外界にそれを動かす次の変化が起こるまでは」（12行目）という表現から、「死んだ蜂」をどのような存在として捉えていることがうかがわれるか。**

答 自らは動くことのない不動・不変の静かな存在。

問 **「その静かさに親しみを感じた。」（15行目）とあるが、この親しみは何に対する親しみか。**

答 「死」の静かさ。

補 第一段の終末の「何かしら死に対する親しみ」（一九八・7）と対応させて考える。

問 **◉「いかにも」という語の多用には、どのような効果があるか。**

答 蜂の生死について、作者の感じ方をそれ以外のことはないという程度まで強調している。生と死を際立たせ、また、一種のリズム感を生じさせている。

補 ただし、「いかにも」とは、まさにそのようだということである。前後の説明は簡潔で、詳細に説明しないことでかえって、読者ごとに異なる想像を許容しながら、主人公との感慨の共有を促す表現だと言える。

●二〇〇ページ

問 **「それを助長し」（2行目）が指す言葉を本文中から探しなさい。**

答 嫉妬。

問 **「「殺されたる范の妻」を書こうと思った」（5行目）とあるが、ここで自分が思った気持ちはどのような気持ちか説明しなさい。**

答 范に殺されて墓の下にいる范の妻の死骸から想起される「静か」な気持ち。

補 「青山の土の下」にある祖父や母の死骸との重なり合いも併せて教授したい。

問 **「自分は『范の犯罪』という」（一九九・16）～「気持だったので弱った。」（二〇〇・9）という文章が蜂の文章の後に描かれることに主人公のどのような変化を見て取れるか。**

答 死骸から死のイメージを想起する主人公が、単に静かさに親しみを感じているだけの状態から一歩踏み込み、その親しみを積極的に表現したいと考えるようになったことが読み取れる。

●二〇一ページ

問 **◉「動作の表情」（7行目）とは、どのようなことか。**

答 動作が、感情をよく表す顔のように、内部の心情を表していること。

補 直前に「顔の表情」とあるのと対照されている。

問 **「あひる」（11 行目）の描写は、ここでは、どのような効果を生んでいるか。**

答 「あひる」が頓狂であればあるほど、それと対照的に死が迫ったねずみの悲劇的運命を強調される効果。

補 ねずみの動騒は偶然近くにいても「あひる」にとっては他者の動騒でしかなく、したがって「死」は他者とは共有できないその個体特有のものである。この「あひる」の存在が全体の息苦しさを救っていることにも注意したい。

問 **◉「寂しい嫌な気持ちになった」（15 行目）のは、なぜか。前の部分の「寂しい」気持ち（一九七・5、15）と対比して考えてみよう。**

答 自分も、ねずみのように必死でもがくかもしれないという考えに、平静だった心を乱されているから。死を考えても親しみを感じるなど落ち着いていた前の部分の心情が、鼠の死に際を見たことで覆っている。

問 **「あれが本当なのだと思った。」（15 行目）の「あれ」は何を指しているか。**

答 死ぬに決まった運命を担いながらもねずみが殺されまいと、全力を尽くして逃げ回っている様子。

●二〇二ページ

問 **「それに近い自分」（4 行目）とはどのような自分のことか。**

答 ねずみと同じように死から逃れるために努力した自分。

問 **「しかし」（13 行目）は、どのような内容を受けているか。**

答 「死の恐怖に襲われなかったのも自分では不思議であった。」（二〇二・10）を受ける。

補 潜在的には死の恐怖があったと考えられる。そうした潜在的恐怖心に対する「しかし」であろう。

●二〇三ページ

問 **「あるがまま」（3 行目）と「　」をつけてある理由と、この部分の意味について考えなさい。**

答 「　」を用いたのは強調。これが生きるにあたっての原理だと強く意識している。意味は、あるとおりに、そのままということ。「あまり変わらない自分であろう」と考えれば、生き延びるために「ありのまま」の動騒を繰り広げるだろうという意味。

補 「あまり変わらない自分であろう」の部分は、「であろう」（＝だろう）という言葉遣いに注意しながら、「ねずみの場合と、そう変わらないのだったに相違ない」（1 行目）との対応関係から指導する。

問 **◉「両方」（4 行目）とは、何と何を指しているか。**

答 「気分で願うところ」と「実際」。

補 「気分で願うところ」は、自分の生命に関する事態に即して、こうありたい、こうあるだろうという心情、「実際」は、具体的に起こす行動のこと。

つまり、「気分で願うところ」は静寂な死のあり方、「実際」は、死に切るまで生きる努力を続けること。

補 ただし、「気分で願うところ」ついては、運命の違いによりもたらされる意識など、若干読解の余地が残る。

●二〇四ページ

問 **「いもり」（3 行目）の登場場面までの風景描写がこの作品全体の構成の上で果たしている役割について考えてみよう。**

答 次に続くいもりの死への、前奏としての役割を果たし、秋の夕暮れの冷ややかで物静かな感じを作り上げている。

補 「黄泉の国」のイメージを読み取る説と、あくまでも実際の景色の描写であるとする説の 2 通りの研究論文がある（「語句の研究」や「キ

ー・ポイント「桑の木の場面について」参照）。

●二〇五ページ

問 **⊙「生き物の寂しさ」（8行目）とは、どのようなことか。**

答 生死が偶然によって左右されていること。

補 主人公がいもりを殺す意図を持っていなかったことからすると、いもりの死は偶然であったと言える。

問 **「いもりは偶然に死んだ。」（9行目）とあるが、いもりの死が偶然であったことはどのように描かれているか。適当な部分を二〇四～二〇五ページから順に抜き出しなさい。**

答 ・いもりを驚かして水へ入れようと思った。
・別にいもりを狙わなかった。
・それが当たることなどは全く考えなかった。

問 **「しかし実際喜びの感じは湧き上がってはこなかった。」（14行目）のはなぜか。**

答 蜂・ねずみ・いもりの死から、自身のことに思いをはせるときに、その生がひどく単純で不確かな要因に支配されていることに気づき「寂しい」気持ちが起こってしまったから。

問 **「生きていることと死んでしまっていることと、それは両極ではなかった。」（15行目）のはなぜか。**

答 偶然が生き物の生死を支配すると実感したとき、今まで抱いていた生と死とは正反対のもの、両極端なものという思いが否定され、生死の境界は極めて不確実なもの、あいまいなものと思うようになったから。

●二〇六ページ

問 **「そういう気分」（2行目）とは、どのようなことか。**

答 「生きていることと死んでしまっていることと、それは両極ではなかった。それほどに差はないような気がした。」（二〇五・16）こと。

補 偶然ながらも生きて歩いていることに「感謝しなければ済まぬような気」がするが、「実際喜びの感じは湧き上がっては」こない。生きることへの確実な実感を持てなくなった主人公の衝撃を、感覚と思念の両面から表現している部分である。

問 **⊙「三週間いて」（3行目）とは、どのような心情を表しているか。**

答 冒頭に「我慢できたら五週間くらい」と書いてあるので、我慢しきれなかったことがわかる。城の崎が、自分が死と向き合う場である、ということの重さに耐えきれなくなったと考えられる。

問 **⊙「もう三年以上になる」（3行目）という時間の経過の記述は、どのような効果を付け加えているか。**

答 脊椎カリエスの危険性も脱したものの、生き延びてほっとしたというよりは、怪我当時の死生観が持続していることを表している。

●まとめ

問 **「蜂」「ねずみ」「いもり」について、それぞれの描写の特徴を説明しなさい。**

答 蜂＝忙しく立ち働く蜂と、死んで動かない蜂が鮮明に描かれており、生死の対照が印象的に焼きつけられる。ねずみ＝必死にもがくねずみの動騒の恐ろしさが描かれ、あひるののんきな描写を挟んで鮮明な印象を与える。いもり＝死んでいく過程が短文で明確に描かれており、偶然に支配されてはかなくも死んでしまう生き物のあり方が不気味なまでに述べられている。

問 **この作品の主題を、三つの小動物の死に言及して一三〇字程度でまとめなさい。**

答 蜂の死から、死に対して静かさ、親しみを感じ、ねずみの動騒から、静寂の前の恐怖を感じつつも、「あるがまま」に生きようと思い、いもりの死から、偶然に支配される生き物の寂しさを共感し、生と死は両極ではなく、それほどに差はない、という心境になっていく。（一二二字）

語句の研究

●一九六ページ

1山手線　跳ね飛ばされたときの様子などは「参考」欄にも揚げた日記などを参照のこと。「城の崎にて」初出当初の山手線は中野～新宿～東京～品川～池袋～田端～上野と、「の」の字の経路をたどっていた。現在のような環状運転を行えるようになったのは大正十四（一九二五）年の上野～神田間の線路が完成したことによる。一九六ページの一両編成の写真とあわせて、当時の風俗と現在の風俗の違いを紹介する一助になる。

1城崎温泉　池内輝雄は志賀直哉の友人である長与善郎の父、長与専斎が城崎温泉に縁のある人物であった事を手がかりに、『但馬城崎温泉案内記』という小冊子を参照しながら、「傷の治療はもとより胸部、脊髄などの病の療養に適するという城崎温泉の効能は、その意味で、まさに「後養生」にもってこい」「知人などに会うことのない東京からはるか離れたところで、しばらく静かに過ごすことが企図されたのかもしれない」と考察している（「「城の崎にて」論」『〈新しい作品論〉へ、〈新しい教材論〉へ、文学研究と国語教育研究の交差　小説編　2』）。湯治が一般的な療治方法の一つとして見なされていた時代の小説であることを生徒に伝えておきたい。

2脊椎カリエス　かつて「亡国病」とまで恐れられた結核菌が脊椎に回った病気。結核といえば樋口一葉なども命を落とした肺結核を連想しがちだが、リンパ節や骨、腎臓、腸などあらゆる場所での結核菌感染が起こりえる。現在では化学療法の発達により病臥期間が大幅に短縮された病気ではあるが、それでもなお髄膜（脳を包む膜）に結核菌が付着し髄膜炎になるなど、全く縁のなくなった病気というわけではない。

3二、三年で出なければ後は心配はいらない　「それから、もう三年以上になる。自分は脊椎カリエスになるだけは助かった。」（二〇六・3）と対応する。医者（他者）に言われた命の心配から脱したことに対して、「三年以上」経ってから「だけは助かった」と限定的な語り方をしていることに注目させたい。

3要心は肝心　注意することが大切。「要心」は「用心」、「肝心」は「肝腎」とも書く。「肝心」は大切、重要の意味に用いる。

4～5三週間以上……我慢できたら五週間くらいいたいものだ　「三週間いて、自分はここを去った」（二〇六・3）と対応する。この対応関係から、主人公は城崎温泉滞在中に何らかの原因があって我慢しきれなくなったと読み取れる。学習者の興味をひくため、最初にこの対応関係を指摘しておいてから本文の通読を始めることも考えられる。

8しかし気分は近年になく静まって　志賀直哉の実生活と重ねれば、結婚問題、作家志望、出版費用の依頼などで、作者と父との衝突・不和、尾道での借家生活の不安定が「近年」の生活として考えられる。また、【頭（身体）＝はっきりしない】／【気分＝静まって、落ち着いたい気持ち】の二項対立を指摘することで、後の【寂しい】／【静か】に注目するきっかけを作ることもできる。

11一人きりで誰も話し相手はない。　「城の崎にて」の草稿「いのち」には城崎温泉での生活が次のように書かれている。「…自分は温泉に来た。自分は精出して入浴した。それから読む事、書く事、散歩する事をし

た。然し書く事と入浴とは一致しなかつた。入浴を精出せば絶えずからだも気分もゆるんだ。」なお、この時期に書いていたのは「暗夜行路」前編の草稿（→二〇〇・脚注14）である。

●一九七ページ

4〜5小さい清い流れ　「やまめ」が「たくさん集まっている」ことから、この「流れ」の清さは国土交通省や環境省が制定した「水質階級Ⅰ」に相当すると考えられる（→「参考」資料①）。また「足に毛の生えた大きな川がに」は記述された外見および生息域から、モクズガニを指すと思われる。城崎温泉は海に近いゆえに遡上してきたのであろう。いずれにせよ小さな生き物から周囲の自然や雰囲気を想像する一つの手がかりになる表現である。

5やはり沈んだことが多かった。　「やはり」は、前の「冷え冷えとした夕方、寂しい秋の山峡」という、周囲の風景の持つ情調（寂しさ）を受けて使われている。「沈んだこと」とは、すぐ後の「寂しい考え」すなわち「けが」「祖父や母の死骸と何の交渉もなく寝ている自分の死骸」についての考えである。

8一つ間違えば　「一つ」は副詞で、ちょっと、ほんのわずかという意味。

16いつかはそうなる。それがいつか？　「いつか」は漠然とした、それほど切迫感のない心情である。次の文の「知らず知らず遠い先のことにしていた。」（一九八・1）という程度の「いつか」である。

●一九八ページ

3自分は死ぬはずだったのを……仕事があるのだ　長嶋和彦は、実際に志賀直哉が中学時代に読んだであろうロード・クライブの伝記を特定した上で、以下のように指摘している。「『城の崎にて』に書かれている「自分は死ぬはずだったのを助かった」というのは、クライブが二度ピストル自殺を図ったけれども、弾丸が確かに装塡されていたにもかかわらず、なぜか二度とも弾丸は発射せず、一命を取り止めたことを言っているのである。」（「クライブ卿興信録―『城の崎にて』の「ロード・クライブ」について―」）また、この部分は「そう思うことによって」の「そう」に相当する部分である。

6しかし妙に　クライブのような一種の使命感、奮い立つような人生の意義を感じたかったが、実際はそれと反対に気持ちが静まってしまったという不思議さを「しかし妙に」と表現している。そして、次の文章にあるように「生」よりも「死」に心が傾いてゆくことになる。

キー・ポイント　「寂しさ」と「静かさ」　「寂しい」という言葉が、「寂しい秋の山峡」（一九七・4）（風景）のような周囲の情景に対してと、「寂しい考えだった。」（一九七・5）（自分の死についての考え）のような「死」そのものに関する感情との二つのものに対して用いられている点に留意したい。周囲の風景の持つ情調を受けて用いられている。さらに、「しかしそれには静かないい気持ちがある。」（一九七・6）の「それ」は直前の「寂しい考え」を指している。この「寂しさ」と「静かさ」とが「しかし」ではさまれていることにも注意する。「自分」（主人公）は、「寂しさ」には直接親しみを感じず、「静かさ」に親しみ（いい気持ち）を感じている。つまり、「寂しさ」の中に「静かさ」を感じ、そこに強い関心を示してゆくのである。また、表現上の違いを考える場合は「寂しさ」は主観的表現であり、「静かさ」のほうは客観的表現と考えることができる。「寂しさ」と「静かさ」が異

質のものであることを押さえさせたい。

7 何かしら死に対する親しみ　けがをきっかけに死を改めて身近に感じるようになったことで起こった「親しみ」だが、ここではまだ漠然とした、そこはかとない感覚で、祖父や母の「死骸」を想像することから生じた実感的な感慨であることが印象づけられる。また、「城の崎にて」は「三年以上」経った時点から城崎温泉滞在を振り返る形式の小説であることを重視すれば、三つの小動物の死を見る前のこの時点では、まだ「死に対する親しみ」を明確に言語化して語れないのだとも読み取れる。

15 欄干　ここでは、旅館の二階の部屋にある縁側の手すり。

16 死んでいるのを見つけた。　主人公は生きている蜂を「眺めていた」のに対して、死んでいる蜂は「見つけ」ている。生に対しては受動的な視線でとらえているが、死に対しては能動的な視線でとらえていると考えることもできるし、また、【P一九七での簡単に見つかる「やまめ」】／【「なおよく見る」と見つかる「川がに」】という対比に落とし込むことや、「祖父や母の死骸」から死のイメージを想起することを繰り返していると理解することもできよう。いずれにせよ蜂の死骸を「見つける」ことで、死そのものの永続性・普遍性に親しみを覚えるようになっていくことは押さえておきたい。

●一九九ページ

2 拘泥する様子はなかった。　擬人法でハチの行動を表現している。前文「冷淡だった。」と同様、主人公の心情が強く反映される表現技法である。

6 いかにも死んだものという感じ　蜂は既に「死んだもの」であり、したがって、この場合、死は完了した形で存在する。その点が、後のねずみやいもりとは違っている。

12 外界にそれを動かす次の変化が起こるまでは　雨が降るか、風が吹くかして初めて蜂の死骸は移動する。死んだ蜂自体は自分では動かず、他のものに影響も与えもしない。この没交渉という点で「青山の土の下」にいる「祖父や母の死骸」（ないしは想像上の自分の死骸）と蜂の死骸を並べて考えることも可能であろう。

14 それにしろ、それはいかにも静かであった。　「それにしろ」の「それ」は死骸がありに引かれていくことを指す。「しろ」はサ変・命令形であるが、この場合は、軽い仮定を示す。「それはいかにも」の「それ」は死骸を指す。ありに引かれて動かされ、食い散らかされる死骸がなぜ静かなのか。ここは実際に見つけた死骸から想起した「死のイメージ」の静かさがあるのである。引かれても、食われても死は不変・不動。永遠の静なのである。

キー・ポイント　蜂の描写に見られる「寂しさ」と「静かさ」の違い　「寂しさ」は【生きているもの】の対として【死んでいるもの】を捉えたときに生じた主観。すなわち他の事物に影響を与えられず、ただそこに存在することしかできない、外界との没交渉性に起因する心情である。一方で「静かさ」は死そのもののイメージである。「三日ほどそのままになっていた」（一九九・5）という事実から、死の不変性・不動性を時間の連続上において捉えている。永遠にあり続けるというイメージから発した穏やかな感じである。

16 その少し前　蜂の死骸を見る前。一九六・10に「読むか書くか」とあり、このことを指すととらえることもできるし、城崎温泉滞在以前ととらえることもできる、解釈に

揺れのある表記である。なお志賀直哉が「范の犯罪」を書いたのは初出の「白樺」紙上によれば大正二（一九一三）年九月二十四日のこととされており、これは城崎温泉滞在（同年十月十八日より）以前のことである。

●二〇〇ページ

2それを助長　「それ」は「嫉妬」を指す。大正時代前後では、精神／身体の二項を精神／生理と表現することも多かった。范にとって「嫉妬」は心理的、「生理的」は身体的な殺害の要因となっている。

3その静かさを書きたい　范に殺され墓の下にいる妻の死骸から想起する静かさを書きたい。蜂の死骸から「静かさに親しみを感じた」後にこのエピソードが書かれており、妻の死骸と蜂の死骸（あるいは祖父や母の死骸）が同列のものとして並べられている。一九八・7で感じていた「何かしら」の親しみが、蜂の死骸を見つけたことで、言語化したいという欲求が現れるほどに具体化されたともいえる。

●二〇一ページ

2魚串　魚を焼くときに用いる串。竹製のものと金属製のものとがある。ちなみに作者の日記には「竹クシ」とある。

7顔の表情……動作の表情　ふつう表情と言えば顔の場合に用いるが、作者はねずみの本能的な必死の動作を、生への一生懸命な願望の表れと見て、こう表現した。

8それが一生懸命であることがよく分かった。　「それ」は「どうかして助かろうとしている」（二〇一・7）ねずみの動作を指す。

12頓狂な顔　慌てた、どこか間の抜けた顔。同じ石に対して、あひるが頓狂な様子を見せれば見せるほど、ねずみの必死さが克明に浮かび上がる。また、あひるが「せわしく足を動かして」（二〇一・13）いることから、あひると「忙しくその脇をはい回る」（一九九・2）蜂とを接続して、生のイメージを意味づけることもできる。

15寂しい嫌な気持ちになった。　次の二行にある「恐ろしい」という感じから発した心情である。完全な死に至るまではなんとか生きようともがく生き物の姿、死に至る推移（動騒）に対する「自分」の本能的な拒否反応を意識したものである。

15あれが本当なのだと思った。　「あれ」は14～15行目の「ねずみが……逃げ回っている様子」を指す。

●二〇二ページ

4それに近い自分　ねずみと同じように死から逃れるために努力した自分。

7～9半分意識を失った……自分の問題だった。　「いちばん大切なこと」とは自分のけがの手当、自分の命を指す。また「しかも」（並列・添加の接続詞）は前文の「半分意識を失った状態で……よく頭の働いたこと」の不思議さと、自分の問題であるにもかかわらず、そのようにしたことの不思議さとを並列・添加する働きをしている。他人のけがの場合なら冷静に判断をし、援助の努力ができるのも当然だろう。しかし、自分に直接降りかかったけがに対して、しかも半分意識を失った状態で、冷静に判断できたことが不思議に思われたのである。

●二〇三ページ

2それが今来たら　「それ」は「ねずみの場合」（二〇三・1）、つまり致命傷で死の宣告を受けたことを指す。「ねずみのようなことが起こった」（二〇二・3）ら、つまり自分のけがが「フェータルなものだともし聞いた」（二〇三・13）ら、という意味。

2なおかつ、あまり変わらない自分であろう　「なおかつ」（副詞）はそれでもやはりとい

う意味。「であろう」は「どうだったろう」（二〇二・14）「襲われなかったろう」（二〇二・15）などから、「だろう」（推量）と同じ意味と考えられる。「ねずみの場合と、そう変わらないものだったに相違ない」（二〇三・1）の対応関係に鑑みて、【あまり「ねずみの場合」と変わらない自分だろう】という意味に取りたい。

3「あるがまま」で　「　」は強調。本文の文脈上、この「あるがまま」（言葉の意味は「そのまま」、「存在するとおりに」）は「自分は助かろうと思い、何かしら努力をしたろう」（二〇二・16）、つまりねずみと同様の動騒を起こすという意味に取りたい。

3気分で願うところ　死ぬなら、ねずみのような動騒は起こしたくない、静かに死にたいと願う心情。ここでの「気分」は「実際」の相対語として用いられている。

3実際にすぐは影響はしない　「実際」は死に直面したときの自分の実際の状態で、この場合は名詞。前項を受けて静かに死にたいと気分的に願っても、それが現実の実際の場面においてもすぐに影響し、自分の願ったとおりになるというわけではないという意味。

4両方が本当で　「両方」とは「気分で願うところ」と、「実際」の二つをいう。「気分で願うところ」は、自分の生命に関する事態に即して、こうありたい、こうあるだろうという心情、「実際」は、具体的に起こす行動のこと。穏やかに静かな死を迎えたいという心情も、死を迎える前に動騒をおこすだろうという予測も、そのどちらもが嘘偽りのない真実だという意味。

4影響した場合　自分の希望が実際（現実）の場面に影響を与え、希望したとおりの実際（現実）になること。

5それはしかたのないことだ。　主人公はここまで見てきた死から、「静かさ」に関わる「両方」の矛盾を「それでいい」とした上で、そのまま「しかたのないことだ」という言葉で語り、受け止めている。

6またしばらくして　作者の日記によると、城崎温泉で「蜂の死と鼠の竹クシをさされて川へなげ込まれた話を書きかけてやめた。」とあるのが十月三十日。そして十月三十一日の項に「やもりに石を投げたら」死んでしまったことが書いてある（やもりは誤記）。城崎到着二週間後のことである。

9物が全て青白く……そわそわとさせた。　ここでの「物静かさ」は主人公を「かえって」「そわそわ」とさせており、それまで「親しみ」を感じていた「静かさ」とは質的に異なる「物静かさ」である。よってこの「物静かさ」は「死」の象徴としての「静かさ」ではなく、あくまでも実景の描写としてとらえることができる。一方で「物が全て青白く、空気の肌触りも冷え冷えとして」を、一九七・10～11の「青い冷たい堅い顔をして」墓の下に寝ている死骸の部分と対応させて、桑の木の場面をいもりの死に向けた不気味な前奏的表現と考える立場もある（→キー・ポイント　桑の木の場面について　参照）。

15原因は知れた。　「参考」欄に掲示してある通り、すでに明確に言語化されていた桑の木の葉の「原因」をあえて削除した桑の木のエピソードを挿入することで、いもりの場面に向けて、秋の夕暮れの冷え冷えとした雰囲気を作り上げることができたという作品効果を重視したい。

キー・ポイント　桑の木の場面について　桑の木の場面は従来「黄泉の世界」のイメージを読み込む立場と実景の描写として読解する立場の二通りに解釈が分かれてい

る記述であり、指導上においても扱いが難しいところである。確かに「物が全て青白く」など、「黄泉の世界」を連想させる記述は多く、また「いつまで行っても、先の角はあった」（二〇四・1）として桑の木の場面からの連続性が示唆されるいもりの死においても、多様な読みを可能とする。だが逆説的に言えば、「黄泉の世界」を前提とした読解は、「黄泉の世界でいもりを殺す」という形で読解への大きな影響をもたらし、結果として主人公の死生観を必要以上に観念的なものにしてしまう恐れがある。本教材では、「教材のねらい」にもある通り、文章の意味それ自体を読み取る練習をしたい。したがって本指導書においては桑の木の場面を実景の描写として読解し、桑の葉が動く原因を明確にしないことによる作品効果（＝いもりの場面に向けた雰囲気を持続させる効果）を重視している。

●二〇四ページ

5 自分は先ほどいもりは……しかしもうそんなことを考えなくなっていた。　直接生・死に関連しない文章であるが、後の展開の偶然性への伏線ととらえることもできる。心底嫌いだったり、逆に好きだったりしたら、石を投げて驚かせてやろうとする気も起きないはずである。

14 石はコツといってから流れに落ちた。……もう動かない。いもりは死んでしまった。　死骸を見つけた「蜂」、死への動騒まっただ中の「ねずみ」の段落には見られない、生から死への瞬間の描写である。いもりを襲った突然の死を、短文や「た」止めを駆使してたたみかけるように表現している。極めて印象的な感銘を読み手に与える迫力も味わわせたい。

●二〇五ページ

7 いもりの身に自分がなってその心持ちを感じた。　いもりの描写から、その死が全くの偶然であったことが知れる。「自分に妙な嫌な気をさした。」（二〇五・5）のは罪悪感からでなく（「虫を殺すことをよくする」（二〇五・4）とある）、「偶然性」によるものである。すなわち、いもりも自分も、その生命を「偶然性」に支配されている「生き物」であるということの実感が「妙な嫌な気」を起こさせ、「生き物の寂しさ」（二〇五・8）という気分として定着したのである。そしてこの実感は、いもりのそれと全く同じであるという意識から「いもりの身に自分がなって」という気持ちも生じさせたのである。

8 生き物の寂しさをいっしょに感じた。　いもりや蜂、ねずみ、また人間でもなく「生き物」としている点に注意したい。主人公は「死ななかった」ことに感謝すべきであると思うものの、一方では「死」と「生」にはそれほどの差はないという感慨に思い至っていくのである。「偶然」によってその生命を支配されるのは「生き物」全ての寂しい運命であるという感慨である。

14 しかし実際喜びの感じは湧き上がってはこなかった。　偶然にも生き残ることができたという喜びよりも、偶然に支配される生き物の寂しさのほうが「自分」をより強くとらえていたからである。文脈から理由を指摘させるならば、すぐ後の「生きていることと……両極ではなかった。それほど……気がした。」がこれにあたる。前行「気もした」とあわせてロード・クライブで読んだ使命感に実感が伴わなかったこととの対応を見ることもできる。

15 生きていることと死んでしまっていることと、それは両極ではなかった。　「両極」は遠く離れた正反対のものという意味。「偶

然が生き物の生死を支配する」と実感した以上、生と死の境界は極めて不確実で、従来自分が考えていたような相互反極関係（正反対、両極端）ではないということ。

キー・ポイント　生きていることと死んでしまっていることと、それは両極ではなかった。　死に隣接した事故の体験をもとにして、生き物の生と死について観照してみると、それまで両極と思っていたものが、さほど差のないものだという心境になった。生と死とは偶然の律に支配されていて、ひょっとした拍子で生は死へと暗転する。それは例えば「どうしたのかしら」（二〇四・16）と思うほどに損傷のないまま死んだいもりの死骸や、二〇五での蜂やねずみの死骸のイメージ（ありや魚などに食べられず、損傷のないまま静かにあり続けるイメージ）に共通する、存在の連続性とあわせ考えれば、主人公にとって死はこの世との永の別れではなく、単に存在形式が変化したに過ぎない一形態であるともいえよう。生と死についての新たな視野を獲得したのである。

16 視覚は遠い灯を……ただ頭だけが勝手に働く。　「足の踏む感覚も」（二〇六・1）と並列の助詞で並べていることから、視覚、触覚とも不確かなのだといえる。すなわち、遠い町の灯をはっきりそれと意識しているわけではなく、また足下を確認するわけでもない。更に頭も、身体的、感覚的条件に結びついていない状態で、知覚がただ勝手に働いているのである。言いかえれば、主人公は必然性があって生きているのだという実感が消失し、不確かな身体性と相まって、偶然生きているのだという考えだけが勝手に進んでいる状態だといえる。結果的に城崎温泉の滞在を三週間で我慢しきれなくなった主人公の衝撃の大きさを感じ取るようにしたい。

●二〇六ページ

3 自分は脊椎カリエスになるだけは助かった。　「助かった」ことが「脊椎カリエスになる」ことだけに限定されていることに注意したい。逆に言えば、他のことは継続中であって、全てのことが助かったわけではなかった。

注意する語句

（＊で用例を示した）

ふち…水を深くたたえた所。
＊魚はふちに深く沈んでしまった。

調える…望ましい状態に戻す。ととのえる。
＊食事の支度を調える。

相違ない…間違いない。確実である。
＊あの宝石は盗まれたのに相違ない。

肌触り…肌に接したとき受ける感じ。
＊肌触りを確かめる。

物静か…ひっそりとして静かなさま。
＊物静かな街を歩く。

何気なく…明確な目的や意図なく物事を行うさま。また、そのように見えるさま。さりげなく。
＊隣の席の彼女に何気なく話しかける。

肘を張る…肘を張り出していかにも強そうに装う。肘張る。
＊精一杯の虚勢を示すために彼は肘を張った。